

幼児の性役割行動の習得に及ぼすモデルの効果

——言語的手がかりと視覚的手がかりを中心に——

南 憲 治*

問 題

幼児は、5～6才になると性役割の概念をほぼ習得し（井上、1959；小橋川、1969；Ward, 1969）、場面、時間、動機などの変化によっても自分の性が変わらないという性の恒常性（gender constancy）を獲得するようになる（Slaby & Frey, 1975）。したがって、この年齢の幼児は自分の性に応じて行動を調節できるようになり、性役割行動を習得する場合、周囲の大人のしつけによる受動的な学習だけでなく、幼児自らが、モデルを観察することによって自分の性に合った行動様式を習得していく過程がより重要になってくるといえよう。

性役割の習得においては、観察学習が重要な役割を果たしていることは、多くの研究者によって指摘され（たとえば、Kohlberg, 1969；Maccoby & Jacklin, 1974 など）、特に Bandura をはじめとする社会的学習理論の立場に立つ研究者によって強調されている（Bandura & Walters, 1963；Mischel, 1966, 1970）。

社会的学習理論は、従来、人格心理学で同一視、実験心理学で模倣と呼ばれてきた事象を実験的に検証しようとした（Bandura & Walters, 1963）点で積極的な意義をもっている。最近、この影響を受けて性役割との関連でモデルの問題を実験的に扱った研究が増えつつある（たとえば、小橋川、1966；Grusec & Brinker, 1972；Perry & Perry, 1975；Slaby & Frey, 1975；Wolf, 1973, 1975, 1976 など）。このうち小橋川と Wolf の実験は、Banduraら（1963）が指摘しているモデルの3つの効果**のうち、「抑制するようになっている反応を強めたり（制止効果）、弱めたりする効果（脱制止効果）」を性役割行動を使って実証しようとしたものである。それによると、幼児が社会化の過程において抑制するようになっている

異性役割行動が、同性モデルの異性役割行動（異性玩具で遊ぶ行動）を観察することによって脱制止され、モデルを観察しない統制群に比べて増加することが見出されている（小橋川、1966；Wolf, 1973, 1975）。

これに対して、本研究は、Bandura らがモデルの効果として第1に指摘している「新しい反応様式を習得させる効果」を性役割行動の分野で検討しようとするものである。

幼児が新しい性役割行動をモデルの観察によって習得する場合、単にモデルの示範行動を観察する（視覚的手がかり）だけでなく、その示範行動が性役割行動であるという言語的手がかりが与えられると、性役割行動を習得する上で効果があると思われる。このような言語的手がかりの重要性については、異性役割行動の回避に及ぼす言語的手がかりの効果をみた研究からも推察される。それによると、女性モデルが女性玩具で遊びながら、「こちらにある玩具は女の子の玩具だね。」と言ったり（清村・小橋川、1967）、あるいは、男性モデルが中性玩具で遊んでいる途中に、女性玩具に近づいて、「こちらのおもちゃはいいおもちゃだけど、女の子のおもちゃばかりだから、男の子はこんなおもちゃでは遊ばない。」と言うと（小橋川・清村、1968）、モデルを観察していた男児（5～6才）の女性玩具を回避する傾向が強化されることが確認されている。

以上から、本研究の第1の目的をまとめると次のようになる。性役割の概念を習得していると考えられる年齢の幼児が、新しい性役割行動をモデルの観察を通して習得していく際のモデルの役割について、モデルの示範行動（視覚的手がかり）とモデルが発する言語的手がかりの2つの点から検討することを本研究の目的とする。

次に、性役割の習得の程度について、従来から性差が指摘されている。幼児の性役割選択の測定によく使用される It Scale の結果によると、女兒より男児の性役割の習得の程度が高いとされている（Brown, 1956, 1957）。しかし、この It Scale に対しては、性役割選択を幼児にさせる際に使用する「It」と呼ばれる子どもが男の子

* 京都大学教育学部（現所属、親和女子大学）

** 1) 新しい反応を習得させる効果

2) 観察者が抑制することを学習している反応（例えば攻撃的行動）を強めたり、弱めたりする効果

3) 観察者が前もって学習している反応の生起を促進させる効果

にみられ易いという批判があり (Brown, 1962; Fling & Manosevitz, 1972), 上記の結果に疑問が出され, It Scale を実施する場合に種々の改良がなされている。たとえば, Lansky ら (1963) は, It を用いる標準法*とともに, It を封筒の中に隠して子どもに絵カードを選択させた。その結果, どちらの方法でも, 女子の適切な選択が, 男子のそれよりも優れていることがみられた。わが国においても, 小橋川 (1958) が, It の代わりに性別のあいまいな人形を, 稲田 (1971) が赤ん坊の絵を用いたところ, とともに, 男子よりも女子の性役割選択が発達していることが見出された。これに対して, Endsley (1967) は, Lansky らと同様に, 標準法とともに, It を封筒に隠して It Scale を実施したが, 逆に, 女子より男子の成績が優れているという結果が得られた。又, 性差を認めていない研究もみられる (Thompson & McCandless, 1970)。このように, 性役割の習得の程度について一致した結果は認められていない。そこで, 本研究の第2の目的として, 性役割をモデルの観察によって習得していく際にどのような性差がみられるかを調べることによって, 性役割の習得の程度に関する性差を検討する。

方 法

被験児

京都市の私立幼稚園児が本実験の被験児であり, 年齢によって年長児群と年少児群に分けられた。年長児群は, 男子55名, 女子55名, 年少児群は, 男子57名, 女子37名からなっている。平均年齢は, 年長児群の男子が6才0か月 (5才6か月～6才7か月), 女子が5才11か月 (5才6か月～6才5か月), 年少児群の男子が5才0か月 (4才6か月～5才6か月), 女子が5才0か月 (4才6か月～5才6か月) である。

モデル

本実験と同様に, モデルが玩具で遊んでいるのを幼児に観察させた場合, 子どものモデル (小橋川, 1966) と成人モデル (清村・小橋川, 1967; 小橋川, 1967; 小橋川・清村, 1968) を用いた結果に差が認められていない。そこで, 実験上, 操作しやすい成人モデル (大学院生) 男女各1名を使った。

使用玩具

* It Scale for childrenは, Brown (1956) が作成したテストで, ここでは It Scale と略することにする。このテストは, 玩具, 品物, 道具などからなる男性項目と女性項目の絵カードを対にして子どもに提示し, 性別のあいまいな「It」と呼ばれる子どもの絵を用いて, このItのために絵カードを選択させる。

大学院生20名 (男女各10名) に, 玩具の「性度」と, 子どもにとっての玩具の「魅力度」についてそれぞれ5段階** に評定させた。その結果, 「性度」に関して中性玩具とみなせる評定値を得, 「魅力度」についてもほぼ等しいと評定された積木とパズル・ボール*** を実験で使った (TABLE 1)。また, 幼児に積木とパズル・ボールの性的帰属に関する分類と, 両玩具のうちどちらが好きかについて質問したところ, 大学院生の評定と同様の結果が得られた (TABLE 2, TABLE 3)。

手続

被験児は, 1人ずつ実験者によって教室から幼稚園の会議室に連れてこられ, 積木とパズル・ボールを背にして実験者と一緒に床の上にすわらされる。

TABLE 1 大学院生による玩具の評定値

	性 度	魅 力 度
積 木	3.25	3.5
パズル・ボール	3.0	3.55

TABLE 2 幼児による玩具の性的帰属に関する分類 (人数)

		積 木			パズル・ボール		
		男性 玩具	中性 玩具	女性 玩具	男性 玩具	中性 玩具	女性 玩具
年長児	男	5	9	1	2	11	2
	女	3	12	0	0	11	4
年少児	男	6	4	5	6	5	4
	女	4	6	4	3	7	4
合 計		18	31	10	11	34	14

** 5段階評定の方法は次の通りである。

「性度」の評定方法

1	2	3	4	5
女の子の玩具	やや玩具 やや女の子の	男子の両方 と女の子の玩具	やや玩具 やや男の子の	男の子の玩具

「魅力度」の評定方法

1	2	3	4	5
魅力がない	あが まりない 魅力	普通	か が な る 魅力	魅力がある

*** 球型をしたプラスチックの表面に, 三角, 丸, 四角などの型がくりぬかれてあり, そこから, その型に合う立体を中に入れて遊ぶ玩具。

TABLE 3 幼児による玩具の選択 (人数)

		積木	パズル・ボール
年長児	男	10	3
	女	6	9
年少児	男	6	7
	女	8	6
合計		30	25

実験群の被験児は、玩具を背にして VTR のモニターの前で、名前、年齢等を聞かれた後、幼児用 M—F 尺度*の最初の写真 1 枚だけをみせられ、「これから、こんなテストをやってもらいます。だけど、順番がきちんとなっていないので先生が少し直すから、その間、〇〇ちゃんはテレビを見ていてね。さあ、テレビをつけるよ。」と教示され、モニターに写し出されるモデルの行動を観察する。VTR の観察は、1 実験条件、約 2 分 30 秒で、モデルの示範行動が終了すると、実験者はモニターのスイッチを切り、「〇〇ちゃん、今、テレビを見てもらったけど、先生の方の用意がまだできないので、このテストをやってもらうまで、後にあるおもちゃでもう少し遊んでいてね。」と被験児に教示を与える。

被験児が玩具の方へ向くと同時に、実験者は、ストップ・ウォッチを押して被験児の行動を観察し記録する。被験児の行動観察が終了すると（5 分間）、被験児にモデルは何をしていたか、モデルの性、玩具の好み**、玩具の性的帰属***を尋ね、その後、M—F 尺度を実施した。

なお、統制群の被験児には、VTR によるモデルの観察をさせずに、M—F 尺度の実施の前に、上記と同じ手続で、玩具（積木、パズル・ボール）で自由に遊ばせ、その行動を観察し記録した。

観察方法

実験者は、ストップ・ウォッチを押してから、10 秒ごとに被験児の行動を観察し、記録する（観察回数は、計 30 回）。各観察ごとに、その瞬間、被験児が何に手を触れているか（「接触」）、何を見ているか（「視線」）の 2 つの指標について記録する。2 つの指標は、それぞれ、「積木」、「パズル・ボール」、「その他」のいずれかに分類される。実験者は、観察していることを被験児に気づ

かれないように観察と観察の間は、ストップ・ウォッチを見ているようにした。

ところで、実験者による観察の信頼性を調べるために、積木とパズル・ボールが置かれている場面で 10 名の幼児の行動を、実験者との 1 名の観察者の計 2 名が同時に上記の基準で観察した。この結果に基づいて、観察者間の一致率を求めると、「接触」については 95.2%、「視線」については 98.0% の高い値が得られたので、以後、実験では、実験者 1 名による観察を行った。

実験条件（モデルの設定）

積木とパズル・ボールで幼児を自由に遊ばせると、男子は積木で、女子はパズル・ボールで遊ぶ割合が大きい（TABLE 4 の No Model, TABLE 5 の No Model の結果を参照のこと）。したがって、本実験では、男女とも、それぞれ遊ぶ割合がより少ない方の玩具を、その性の幼児にとって性的に適切な玩具として実験的に操作した。これは、モデルの観察効果をより大きくするためである。即ち、積木を女性玩具、パズル・ボールを男性玩具とした。

実験は、年長児の場合、男女とも、モデルを観察しない統制群と 4 つの実験群の計 5 実験条件からなっている。年長児の男女別の実験条件は次の通りである。

年長男児の実験条件

No Model (15 名)……モデルの行動を VTR で観察せずに玩具で遊ばせる。

NV—M (10 名)……玩具が 2 つあることを被験児に確認させるために、最初、パズル・ボールと積木が VTR によって大写しにされる。その後、モデルが男性であることを確認させるためにモデルの顔が大写しにされ****、男性モデルが、「あ！、おもちゃだ。」と言ってから玩具に接近し、玩具の前にすわり、パズル・ボールで遊んでいるモデルの行動を VTR を用いて観察させる。

V—M (10 名)……男性モデルが登場し、「あ！、おもちゃだ。」と言って玩具の前にすわり、「こっち（パズル・ボールに触れて）は、男の子のおもちゃだ。こっち（積木に触れて）は、女の子のおもちゃだ。僕は、男の子だから、こっち（パズル・ボールに触れて）で遊ぼう。」と言って、男性モデルがパズル・ボールで遊んでいるのを観察させる。

V—F (10 名)……女性モデルが登場し、「あ！、おもちゃがある。」と言って玩具の前にすわり、「こっち（パズル・ボールに触れて）は、男の子のおもちゃね。こっち（積木に触れて）は、女の子のおもちゃね。私は女の子

* 本研究の結果とは直接関係がない。

** パズル・ボールと積木のどちらの玩具が好きであるかを尋ねた。

*** パズル・ボールと積木がそれぞれ、男の子の玩具か、それとも、女の子の玩具であるかを尋ねた。

**** この部分までの VTR の内容は、他の実験条件でも同じにしてある。

だから、こっち（積木に触れて）で遊ぶわ。」と言って、モデルが積木で遊ぶのを観察させる。

V (10名)……男性モデルが登場し、「あ！、おもちゃだ。」と言って玩具の前にすわり、「こっち（パズル・ボールに触れて）は、男の子のおもちゃだ。こっち（積木に触れて）は、女の子のおもちゃだ。」と言うのを観察させる。この条件では、モデルは玩具で遊ばない。

年長女児の実験条件

No Model (15名)……モデルの行動を観察させずに玩具で遊ばせる。

NV—F (10名)……女性モデルが登場し、「あ！、おもちゃがある。」と言って玩具の前にすわり、積木で遊ぶのを観察させる。

V—F (10名)……男児の V—F と同じ。

V—M (10名)……男児の V—M と同じ。

V (10名)……女性モデルが登場し、「あ！、おもちゃがある。」と言って玩具の前にすわり、「こっち（パズル・ボールに触れて）は、男の子のおもちゃね。こっち（積木に触れて）は、女の子のおもちゃね。」と言うのを観察させる。

一方、年少児の実験条件は、男女とも、モデルを観察しない統制群と2つの実験群の計3実験条件(男児：No Model, NV—M, V—M；女児：No Model, NV—F, V—F)からなっている。各実験条件の内容は、年長児の場合と同じである。

なお、年少男児の場合、積木よりもパズル・ボールの接触回数がより多かったの（TABLE 8 の No Model 参照）、接触回数がより少ない方の玩具を、その性の幼児にとって適切な玩具として実験的に操作することと一致しない。そこで、積木を男性玩具、パズル・ボールを女性玩具と操作する実験を年少男児にのみ追加して行った。その実験条件は、次の通りである。

年少男児に対する追加実験の条件

NV—M (10名)……男性モデルが、積木で遊んでいるのを観察させる。

V—M (10名)……男性モデルが登場し、「あ！、おもちゃだ。」と言って玩具の前にすわり、「こっち（積木に触れて）は、男の子のおもちゃだ。こっち（パズル・ボールに触れて）は、女の子のおもちゃだ。僕は男の子だから、「こっち（積木に触れて）で遊ぼう。」と言って、

TABLE 4 年長男児における玩具の接触回数

数値は平均、() 内は SD

	No Model (n=15)	NV—M (n=10)	V—M (n=10)	V—F (n=10)	V (n=10)
パズル・ボール	12.83 (8.46)	21.10 (7.65)	27.90 (2.91)	18.90 (10.50)	24.20 (6.19)
積 木	15.70 (8.04)	8.00 (7.63)	0.00 (0.00)	9.60 (9.99)	4.40 (5.33)
そ の 他	1.47 (1.36)	0.90 (1.64)	2.10 (2.91)	1.50 (1.36)	1.40 (1.11)

TABLE 5 年長女児における玩具の接触回数

数値は平均、() 内は SD

	No Model (n=15)	NV—F (n=10)	V—F (n=10)	V—M (n=10)	V (n=10)
積 木	12.63 (6.66)	14.50 (11.00)	22.60 (9.48)	21.40 (7.39)	21.45 (8.96)
パズル・ボール	16.17 (6.69)	14.20 (10.92)	5.70 (9.51)	6.00 (7.90)	5.55 (10.00)
そ の 他	1.20 (1.28)	1.30 (0.78)	1.70 (2.00)	2.60 (1.20)	3.00 (2.37)

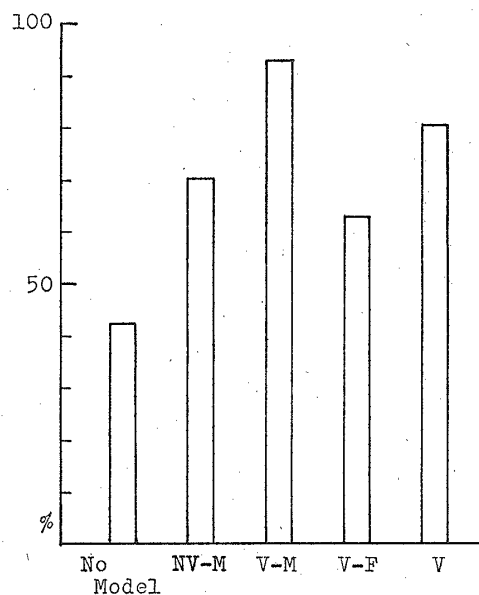


FIG. 1 年長男児がパズル・ボールに接触した割合

モデルが積木で遊ぶのを観察させる。

結 果

指標として「接触」と「視線」をとったが、両者の相関が高い* ので、玩具で遊ぶという点からより積極的な意味をもつと思われる「接触」の結果だけを分析した。

まず、年長児に関して、男児の接触回数の平均と標準

* 各実験条件によって相関係数(r)は異なるが、相関係数の範囲は、 $r=.998 \sim r=.897$ であった。

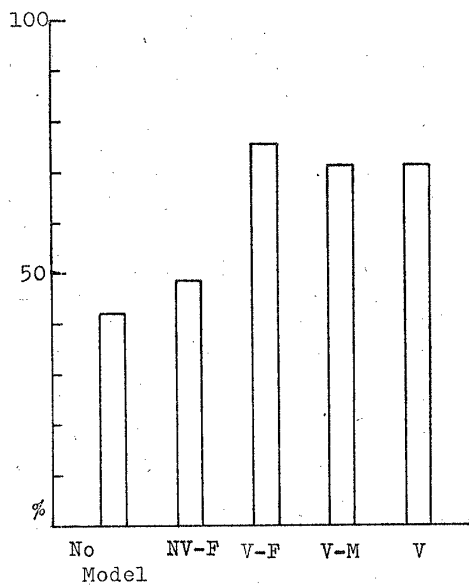


FIG. 2 年長女兒が積木に接触した割合

TABLE 6 年長男児におけるパズル・ボールの接触回数についてのU検定の結果

	No Model	NV—M	V—M	V—F	V
No Model		U=37*	U=9.5***	U=44*	U=23**
NV—M			U=25		U=39
V—M				U=20.5*	U=36
V—F					U=36
V					

*.....P<.05 **.....P<.01 ***.....P<.001

TABLE 7 年長女兒における積木の接触回数についてのU検定の結果

	No Model	NV—F	V—F	V—M	V
No Model		U=66	U=29**	U=32.5**	U=33**
NV—F			U=28*		U=35
V—F				U=36	U=38
V—M					U=50
V					

*.....P<.10 **.....P<.01

偏差が TABLE 4 に、女兒の接触回数の平均と標準偏差が TABLE 5 に示されている。TABLE 4 から、30 回の観察のうち、パズル・ボールの平均接触回数が占める割合を条件別に示したのが FIG. 1 で、TABLE 5 から 30 回の観察のうち積木の平均接触回数が占める割合を示したのが FIG. 2 である。男児のパズル・ボールの接触回数を H 検定にかけると、5 条件間に、1%水準で差が認められた ($H=17.79$, $df=4$, $P<.01$)。そこで、2 条件間の比較を U 検定で行ったところ、No Model と NV—M、No Model と V—F の間は 5%水準、No Model と V の間は 1%水準、No Model と V—M の間には 0.1%水準で差がみられた (TABLE 6)。一方、女兒の積木の接触回数を H 検定で調べると、5 条件間に 5%水準で差が認められた ($H=10.76$, $df=4$, $P<.05$)。そこで、2 条件間の差を U 検定で検討すると、No Model と V—F、No Model と V—M の間、および、No Model と V の間にそれぞれ、1%水準で差がみられた (TABLE 7)。

次に、年少児に関しては、TABLE 8 に男児、TABLE 9 に女兒の結果、TABLE 10 に男児の追加実験での結果が示されている。そして、FIG. 3 には、男児において 30 回の観察のうちパズル・ボールの接触回数が占める割合と、追加実験において積木の接触回数が占める割合を、また、FIG. 4 には、女兒において 30 回の観察のうち積木の接触回数が占める割合を図示してある。年少男児のパズル・ボールの接触回数を H 検定にかけたが、3 条件間に統計的に有意な差は認められなかった ($H=2.39$, $df=2$)。しかし、追加実験の積木の接触回数に関しては、3 条件間に差が認められた ($H=9.76$, $df=2$, $P<.01$)。そこで、追加実験について、2 条件間の比較を U 検定で行ったところ、No Model と V—M の間 ($U=31$, $n_1=15$, $n_2=10$, $P<.01$)、および、NV—M と V—M の間 ($U=23$, $n_1=10$, $n_2=10$, $P<.05$) に差がみられた。一方、女兒の積木の接触回数を H 検定にかけたが、3 条件間に差は認められなかった ($H=2.49$, $df=2$)。

玩具の性的帰属に関する幼児の反応については、FIG. 5 に、年長男児においてパズル・ボールを男性玩具とみなした者の割合が、FIG. 6 には、年長女兒において積木を女性玩具とみなした者の割合が条件別に示されている。

また、玩具の好みについては、FIG. 7 に年長男児で積木よりもパズル・ボールの方が好きであると答えた者の割合が、FIG. 8 には、年長女

TABLE 8 年少男児における玩具の接触回数

数値は平均, () 内は SD

	No Model (n=15)	NV-M (n=12)	V-M (n=10)
パズル・ボール	18.13 (8.30)	19.04 (10.09)	23.85 (6.14)
積 木	11.13 (8.11)	9.46 (9.25)	4.65 (5.39)
そ の 他	0.74 (1.48)	1.50 (1.98)	1.50 (1.36)

TABLE 9 年少女児における玩具の接触回数

数値は平均, () 内は SD

	No Model (n=15)	NV-F (n=12)	V-F (n=10)
積 木	13.03 (9.84)	14.42 (11.13)	20.40 (8.82)
パズル・ボール	15.50 (10.05)	13.83 (11.60)	7.70 (9.48)
そ の 他	1.47 (0.80)	1.75 (1.92)	1.90 (1.45)

TABLE 10 年少男児の追加実験における玩具の接触回数

数値は平均, () 内は SD

	No Model (n=15)	NV-M (n=10)	V-M (n=10)
積 木	11.13 (8.11)	12.45 (9.11)	20.90 (8.18)
パズル・ボール	18.13 (8.30)	14.45 (10.42)	7.30 (8.81)
そ の 他	0.74 (1.48)	3.10 (2.98)	1.80 (1.33)

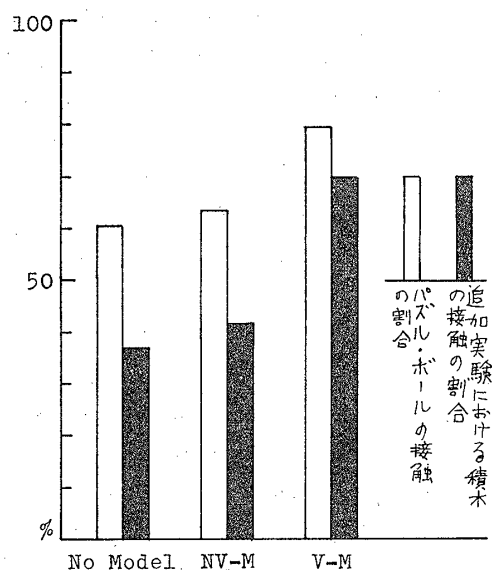


FIG. 3 年少男児が玩具に接触した割合

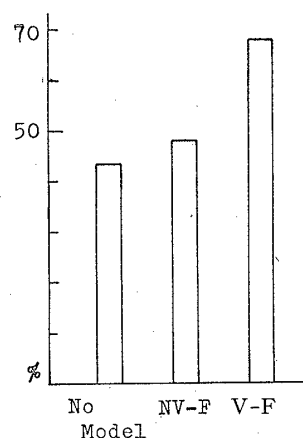


FIG. 4 年少女児が積木に接触した割合

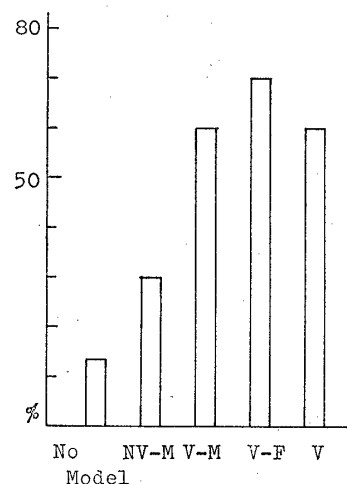


FIG. 5 年長男児の中でパズル・ボールを男性玩具とみなした者の割合

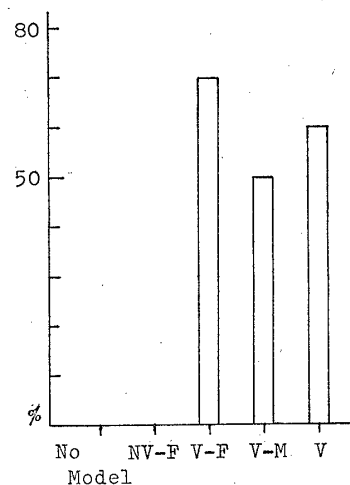


FIG. 6 年長女児の中で積木を女性玩具とみなした者の割合

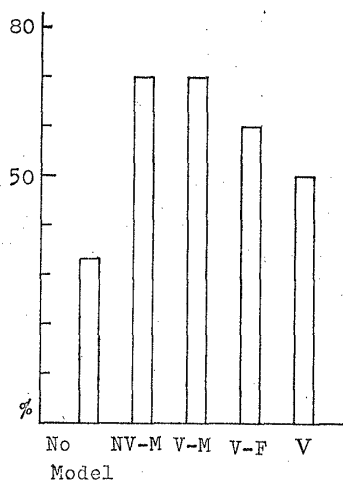


FIG. 7 年長男児の中で積木よりパズル・ボールが好きであると答えた者の割合

児で積木の方が好きであると答えた者の割合が示されている。

考 察

(1) 言語的手がかりと視覚的手がかりの効果

年長児の場合、男女とも、モデルの示範行動（視覚的手がかり）に言語的手がかりが加わった条件（男児のV-M, 女児のV-F）で、被験児が属する性の幼児にとって適切であると実験的に操作した玩具（男児のパズル・ボール、女児の積木）の接触回数が1番多くなっている。これは、幼児がモデルを観察することによって自分にふさわしい性役割行動を習得する場合、単にモデルの示範行動の観察だけでなく、モデルの示範行動に言語的手がかりがつけ加えられるとより効果があることを示している。それでは、両手がかりは、それぞれどのような効果をもっているのだろうか。

そこで、まず、言語的手がかりの効果について検討する。FIG. 5, FIG. 6 から明らかなように、モデルによって玩具の性的帰属が言語的に与えられると、幼児は、本来、中性的である玩具を性的に類型化された玩具であると認知するようになるといえよう。その結果、言語的手がかりが与えられた条件の幼児は、被験児にとって適切だと操作された玩具を好むようになり、(FIG. 7, FIG. 8), その玩具の接触回数が増加したと考えられる。この点は、男児の結果を詳しく分析していくとさらに明らかになってくる。例えば、V条件に属する男児の半数の者は、パズル・ボールが男性玩具で積木が女性玩具であるとモデルが言語化しても、異性玩具とされた積木の方がパズル・ボールよりも好きであると答えている (FIG. 7)。そして、このV条件に属する者の中で、積木の方が好きであ

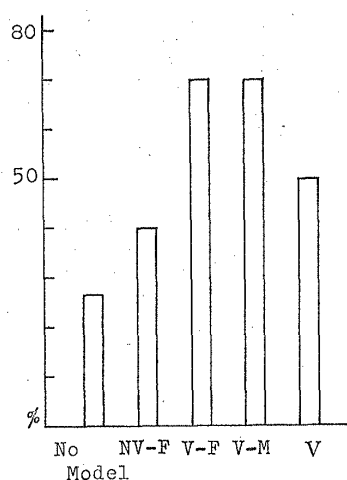


FIG. 8 年長女児の中でパズル・ボールより積木の方が好きであると答えた者の割合

ると答えた5名のパズル・ボールの接触回数の平均を求めると24.8である。これに対して、No Modelで積木の方が好きであると答えた幼児（15名中10名）のパズル・ボールの接触回数の平均は16.65であり、その差は、統計的に5%水準で有意である ($U=7.5$, $n_1=5$, $n_2=10$, $P<.05$)。これは、V条件の男児が、本当は積木の方が好きであるのに、積木が女性玩具であるとモデルが言ったため積木で遊んだら叱られるとか、自分にふさわしくないといった認知過程が幼児に生起し、自分にふさわしいパズル・ボールで遊ぼうという自己強化が働いたことを示唆している。

一方、モデルの示範行動という視覚的手がかりの効果についてみると、モデルの示範行動の観察だけでは、モデルが遊んでいた玩具が、そのモデルの性にとってふさわしい玩具であるとの認知が観察児に生じることはない (FIG. 5, FIG. 6)。ところが、モデルの示範行動の観察の結果、男児においてのみ、NV-Mのパズル・ボールの接触回数がNo Modelのそれに比べて有意に多くなっており、模倣の効果が認められる。このようなモデルの示範行動の模倣にみられる性差は、男児のV-Fと女児のV-Mの結果の差となっても現われている。つまり、男児の場合V-Fにおけるパズル・ボールの接触回数は、V-Mのそれに比べて有意に少ないだけでなく、Vよりも少なくなっている。これは、V-Fの場合、パズル・ボールは男性玩具、積木は女性玩具であるという言語的手がかりが与えられているが、女性モデルが積木で遊んでいるのを観察したために、幼児がモデルの示範行動に影響され、モデルの行動を模倣した結果であると思われる。これに対して、女児の場合、V-Mの積木の接触回数は、V-FやVの値とほとんど変わらない。これは、

女兒が、モデルの示範行動によってほとんど影響をうけずに、モデルが言語的に与えた玩具の性的帰属に従って自分に適切な方の玩具で遊んだことによると考えられる。

次に、年少児についてみると、男児の追加実験でのみモデルの観察効果が認められるだけであり、年長児において顕著であった言語的手がかりの効果も年長児程みられない。また、年長児と年少児の男児のV—M、女兒のV—Fの結果を比較すると、年長児の方が、性的に適切であると実験的に操作した玩具の接触回数が多くなっている。以上から、年少児よりも年長児において、適切な性役割行動を習得する上で観察学習の効果がより大きく、また、性役割行動の習得程度も高いといえるだろう。

この結果は、性役割の概念が5～6才になるとほぼ習得されるという従来の結果とも一致していると考えられる。

(2) 性役割行動にみられる性差

男女で、それぞれにとって適切であると操作した玩具が異なっているので、男女の結果を直接比較することは妥当でないと思われる。そこで、男児の場合はパズル・ボール（年少児の追加実験については積木）、女兒の場合は積木の接触回数に関して、No Modelに対する各実験条件での接触回数の増加率を求め、男女の結果を比較することにした。そして、各条件での増加率を求めると、年長児の場合、男児のVで88.6%、V—Mで117.4%、女兒のVで69.8%、V—Fで78.9%となる。同様に、年少児の場合は、男児のV—Mで31.5%、追加実験のV—Mで87.7%、女兒のV—Fでは56.5%の増加率となる。この結果をみると、女兒に比べて男児の方がより強く性役割行動を示しているといえよう。

ところが、前述したように、年長男児のV—Fと年長女兒のV—Mの結果を比較すると、男児と異なり女兒はモデルの示範行動（視覚的手がかり）によって影響されることなく、自己の性役割の基準に従って行動しているという点で、逆に、女兒の方がより安定した性役割行動を示していると考えられる。

以上のように、本研究は、性役割の習得の程度について、一見、矛盾するような性差を示している。しかし、この矛盾は、表面的には男児の方がより強く性役割行動を示すが、より内面的なレベルでは、男児よりも女兒の方が性役割の習得に関して安定していると考えることによって解決できると思われる。そしてこの見解を支持するような結果が、従来の性役割研究の中で得られている。例えば、性的に類型化された品物、玩具等を幼児に選択させる場合、直接、好きな物を選択させると男女の成績に差がみられないのに、中性とみなせる「赤ん坊」の絵

を用いて、その「赤ん坊」に幼児を投影させる形で選択させると、男児の成績が女兒に比べて悪くなるということが報告されている（南，1974）。さらに、わが国の性役割選択の結果をみると、直接選択法の場合、男児の成績がよいのに対して（井上，1959；間宮，1959），投影法を用いて選択させると女兒の成績がよい（小橋川，1958；稲田，1971）ことが見出されている。また、性役割選択よりも、より内面化された性役割を測定するために、幼児に人物を描かせたところ、女兒に比べて男児の方が異性の人物を描く割合が大きいという結果が得られ、男児の性役割の習得がより不安定なことが示唆されている（南，1974）。これらの諸研究は、本研究の結果も含めて、表面的には、性役割の習得に関して男児の方がより強固であるのに対して、より内面化したレベルの性役割に関しては、女兒の方がより安定していることを示唆しているといえよう。しかし、この点については、現在、データの蓄積が少ないので、今後さらに検討していくことが課題である。

要 約

本研究の第1の目的は、幼児が新しい性役割行動をモデルの観察によって習得する際のモデルの効果について、モデルの示範行動（視覚的手がかり）とモデルが発する言語的手がかりの2つの面から実験的に検討することであった。第2の目的は、性役割の習得の程度に関してどのような性差がみられるかを明らかにすることにあった。

被験児は、幼稚園児で年長児群、男児55名（平均6才0か月）、女兒55名（5才11か月）、年少児群、男児57名（5才0か月）、女兒37名（5才0か月）からなる。実験群の幼児は、モデルが中性玩具で遊んだり、あるいは、中性玩具に対して「男の玩具」、「女の玩具」といった言語的手がかりを与えるのをVTRで観察した後、中性玩具で自由に遊ばされ、その行動が観察された（5分間）。結果の分析は、モデルが玩具で遊んでいるのを観察するという視覚的手がかりとモデルが発する言語的手がかりが、幼児の玩具遊びにどのように影響するかについてなされた。

主な結果は、次の通りである。

- (1) モデルの示範行動（視覚的手がかり）に言語的手がかりがつけ加えられると、新しい性役割行動を習得する上で効果が大きかった。特に、言語的手がかりの重要性が示された。
- (2) 年少児より年長児の方が、性役割行動を習得する上でモデルの観察効果が大きく、また、より分化した性役割行動を示す。

(3) 表面的なレベルでは、女兒より男児の方がより分化した性役割行動を示すが、より内面化された性役割に関しては、女兒の方がより安定していることが示唆された。

＜付記＞

本論文は、京都大学大学院教育学研究科に昭和49年度修士論文として提出したものの一部に加筆したものである。実験をするにあたり御指導して下さいました梅本亮夫教授、ならびに、本論文をまとめる上で貴重な御助言をいただきました坂野登助教授に深く感謝の意を表します。

文 献

- Bandura, A., & Walters, R. 1963 Social learning and personality development. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Brown, D. G. 1956 Sex-role preference in young children. *Psychol. Monogr.*, 70, No. 14
- Brown, D. G. 1957 Masculinity-femininity development in children. *J. consult. Psychol.*, 21, 197-202
- Brown, D. G. 1962 Sex-role preference in children: methodological problems. *Psychol. Rep.*, 11, 477-478
- Endsley, R. C. 1967 Effects of concealing "it" on sex-role preferences of preschool children. *Percept. mot. Skills.* 24, 998
- Fling, S., & Manosevitz, M. 1972 Sex typing in nursery school children's play interests. *Developm. Psychol.*, 7, (2), 146-152
- Grusec, J. E., & Brinker, D. B., Jr. 1972 Reinforcement for imitation as a social learning determinant with implications for sex-role development. *J. per. soc. Psychol.*, 21, 149-158
- 稲田準子 1971 親の養育行動と子の性役割選択 日本心理学会第35回大会発表論文集 397-398
- 井上和子 1959 幼児の性差意識の発達 児童心理 14, 756-762
- 清村武子・小橋川慧 1967 幼児の性的役割行動に及ぼすモデルの影響——モデルと観察児間に役割りの差がある場合——心理学研究 38, 329-332
- 小橋川慧 1958 性役割発達および適応に関する研究(1)——沖縄の6才児にみられる性役割選択——琉球大学教育学部紀要 2, 1-35
- 小橋川慧 1966 幼児の異性役割行動に及ぼすモデルの「脱制止」効果 教育心理学研究 14, 9-14
- 小橋川慧 1967 幼児の異性役割行動に及ぼすモデルの影響 教育心理学研究 15, 34-41
- 小橋川慧 1969 性差と性役割の獲得 児童心理学講座 8巻 Pp.137-184 金子書房
- 小橋川慧・清村武子 1968 幼稚園男児の女性役割行動に及ぼすモデルの影響 教育心理学研究 16, 1-6
- Kohlberg, L. 1969 Stage and sequence: The cognitive-developmental approach to socialization. In D. A. Goslin (Ed.), *Handbook of socialization theory and research*. New York: Richard McNally. Pp. 347-480
- Lansky, L. M., & McKay, G. 1963 Sex role preferences of kindergarten boys and girls: some contradictory results. *Psychol. Rep.*, 13, 415-421
- Maccoby, E. E., & Jacklin, C. N. 1974 The psychology of sex differences. Stanford: Stanford Univ. Press.
- 間宮 武 1959 性差研究の体系化と性差意識に関する研究 教育心理学研究 6, 1-12
- 南 憲治 1974 幼稚園児の性役割——性役割の習得過程にみられる男女差を中心にして——日本心理学会第38回大会発表論文集 604-605
- Mischel, W. 1966 A social-learning view of sex differences in behavior. In E. E. Maccoby (Ed.), *The development of sex differences*. Stanford: Stanford Univ. Press. Pp. 56-81
- Mischel, W. 1970 Sex typing and socialization. In P. H. Mussen (Ed.), *Carmichael's manual of child psychology*. 3rd ed. Vol. 2. New York: Wiley.
- Perry, D. G., & Perry, L. G. 1975 Observational learning in children: Effects of sex of model and subject's sex role behavior. *J. pers. soc. Psychol.*, 31, 1083-1088
- Slaby, R. G., & Frey, K. S. 1975 Development of gender constancy and selective attention to same-sex models. *Child Developm.*, 46, 849-856
- Thompson, N. L., & McCandless, B. R. 1970 It score variations by instructional style. *Child Developm.*, 41, 425-436
- Ward, W. D. 1969 Process of sex-role development. *Developm. Psychol.*, 1, 163-168
- Wolf, T. M. 1973 Effects of live modeled sex-inappropriate play behavior in a naturalistic setting. *Developm. Psychol.*, 9, 120-123

Wolf, T. M. 1975 Response consequences to televised modeled sex-inappropriate play behavior. *J. genet. Psychol.*, 127, 35-44

Wolf, T. M. 1976 Effects of live adult modeled sex-inappropriate play behavior in a naturalistic setting. *J. genet. Psychol.*, 128, 27-32

(1977年8月22日受稿)

ABSTRACT

EFFECTS OF MODEL ON THE ACQUISITION OF SEX ROLE BEHAVIOR IN KINDERGARTEN CHILDREN

by

Kenji Minami

The purpose of the present study was 1) to investigate the effects of model on the acquisition of sex role behavior in children and 2) to examine the sex differences in the acquisition of sex role behavior. According to their age, 204 Kindergarten children were divided into older (55 boys; mean age: 6;0, and 55 girls; mean age: 5;11) and younger groups (57 boys; mean age: 5;0, and 37 girls; mean age: 5;0).

Experimental subjects were exposed to an adult model through VTR (Control subjects were not presented a model). After the subjects observed the model playing with a neutral toy and/or giving sex-typed labels to the neutral toys aloud (i.e., "This is a toy for boys." or "This is a toy for girls."), they were instructed to play with the toys (the same as those they watched through VTR) and their behaviors were observed by an experimenter for 5 minutes. Effects

of the model on children's play behavior were analyzed from two aspects: 1) effects of observing the modeled behavior (i.e., visual cue) and 2) effects of verbal cue uttered by a model (i.e., verbalization of sex-typed labels to the neutral toys).

The main results were as follows.

(1) Under the condition in which verbal cue was added to modeled behavior (visual cue), children could perform sex-appropriate behavior most efficiently.

(2) Older children were more influenced by observing a model than younger children.

(3) Older children were more sex-typed than younger children.

(4) As for sex differences, boys appeared to be more sex-typed than girls at the superficial level. On the contrary, girls seemed to be more stable than boys at the inner level of sex role.